

24. 上藻奥地開拓

吉 江 豊三郎

※ 明治35年2月21日生。

一九号教授場

私の父は、大正5年春に滝上サックルに入地したが、土地が狭く営農が出来ないので、上藻19号の部落会館附近に、成功検査が通らず引揚げとなった土地が、約7町歩ほどあったので、これの貸付を受けて、5年の秋に入地した。

上藻にはその頃は、全部入地していて、其所しか入地できる土地はなかったのだ。丁度私が小学校を卒業した15才の時、上藻に移住して、すぐ青年会に入会した。

その頃、上藻10号には特別教授場があったが、上藻一帯は、基線号線を伝い歩く踏み分け道で、しかも話にならない悪路のため、19号奥からの通学は困難なので、一九号附近にも、教授場を造ることになったのだ。

場所は、今の和橋から滝上寄りの一段高い所で、今もその跡が残っている。丁度サックル峠（現在の路線）開通直前で、それまでの道路は、林さん（友次郎）の住宅のある沢の西側を伝わって、滝上に抜ける道順で、教授場はその道路脇に建てられたのだ。

教授場建設の年は、現在のサックル峠と、上藻12号から、忍路子川勝さん附近に出る道路が開通した年で、大正6年秋である。

この道路工事の現場責任者で、小山田五六と言う人に、教授場と教員住宅を、19号から奥の人たちで、300円を出し合って、建設してもらったのだ。

先生は、奥に入っていた横田福治と言う人の身内で、近衛歩兵上等兵の佐藤という人だった。開校したのは、教授場を建てた次の年の春からだった。

五大峠

そのころの道路は、道路なんて言えるものでなく、名寄興部間の道路へ出るまでは、瀬戸牛峠の山道か、12号から忍路子へ抜ける峠よりなく、どの道も馬車は満足に通れず、駄ぐら馬が漸くだったが、大正6年に殖民道路がつけられたのだ。

12号から忍路子に抜けて、名寄街道へ出る道と、12号から、今の改修前のサックル峠を越えて、サックル原野に出る道が、同じ年に完成した。

これは、1間半（約2.73メートル）のかき均しで、砂利の入らない開き道だったが、大正2年から奥地に入植して、雑穀の搬出が思うように出来なかった農家には、この道路の開通は、例えようのない喜びだった。

また当時名寄が物資の集散地で、滝上方面の人もこの道を多く利用し、毎日のように百頭くらいの駄馬が、延々と連らなって往来して、上藻奥地や、サックル原野の人たちの、生命線とも言える道路だった。

この上藻、忍路子間の約1里に亘る峠を、五六峠と言うようになったのは、道路工事責任者の、小山田五六の名をとってつけたものだ。

※他説として、大正5年、6年の2年で完成した道路なので、五六峠としたと言う説と、上り五カ所、下り六カ所のカーブがあるので、この名になったと言う説がある。

19号の第2教授場は、大正11年10月、森美治所有地に、第1教授場と合併して、上藻小学校となり、廃止された。

いまはその上藻小学校も存在しない。